

よろずは

平成二五年
一月号

「記紀万葉の故地」シリーズでは、記紀万葉に記された地域にかかわる内容をご紹介します。

記紀万葉の故地 2

古代の景観は、今と異なっていたとよく言われますが、いったいどの程度異なっていたのでしょうか。

若狭なる三方の海の浜清みい行き還らひ見れど飽かぬかも

（『万葉集』巻第七の一一七七番歌）

（訳文）若狭にある三方の海の浜が清らかなので、往きにも帰りに見るが飽きないことよ。

右の歌の「三方の海」は、福井県の三方五湖のことです。現在の五つの湖は、塩水（日向湖）・汽水（水月・菅・久々子湖）・淡水（三方湖）からなり、塩分濃度と水深の違いから、五色の異なった青色が見えると言われています。

しかし、江戸時代以前は、久々子湖を除き、すべて淡水でした。そうすると、古代では五色の青色を眺めることはできなかったのかもしれませんが、それでも、旅の景勝地として『万葉集』に収録されたからには、今と違った美しさがあったに違いなく、湖と浜とのコントラストも含めて、どのような色彩であったか、想像がかき立てられます。【万葉古代学係】

タイトルの「よろずは」は、「万葉」を訓読みしたものです。



古代北陸道に併走する現在の道路。写真の中央奥に三方湖がある。